

B—68 杉元の美的効果への一考察（その1）

広島女大家政

小池美枝子

1. 衣服の健全な発達を促すには、衣服を着装することによって生ずる服飾美についての理論的裏付けが必要と考えられる。美を規定することは至難であるが、時代を区切ってその範囲内の定型を一応見出すことにより、現代服飾美への示唆としたいと思う。そこで衣服の装飾性に関係深いと思われる衿元の形態を、西洋と日本の服飾について考察し、着装上の効果を検討する目的のもとに、今回は江戸時代の浮世絵における美人画の絵画表現における衿元の考察より、和服の衿元の美的効果を検討することにした。

2. 資料として鳥居清長作・浮世絵版画の美人画・当世遊里美人合・振袖芸者の衿元をえらび、これに人体美学的考察を行なった。

3. ①衿元の美的効果は、着装時に衿が皮膚に接する位置を下限とし、頤・顎・髪際等を上限とした頸部周辺の皮膚の露出部分の面積の広狭に関係が深い。着装時の開放感・束縛感はその面積の変化によって生ずる。②和服の衿元は定形化されてはいるが、着つけによりかなり広範囲の美的効果をもつ。その美的効果は肉体の露出部分が醸成する2次的な人体美の一種で、間接的な肉体美の誇張表現と解釈される。③衿元の美は動的でなく静的で、消極的な美である。頸部は相当自由で鋭敏な運動性をもつが、その効果は頸部自身の表情とはならない。④衿は衿元の美を決定する補助効果的役割をもつ。